神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

# 御輿先生の第一印象



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2018-04-20<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 吉川, 朗子, YOSHIKAWA, Saeko<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2392 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

# 御輿先生の第一印象

吉川　朗子

横浜生まれ、横浜育ちのわたしにとっては、御輿先生の第一印象が、すなわち神戸市外国語大学の第一印象となった。で、どんな印象かといえば、寛やかで自由、のんびりしていて柔軟、奇を衒わず、ユーモアがあり、ときに皮肉を言うけれども、一言たりとも言葉をぞんざいに扱うことはない――言葉に対する愛情に満ちていて、言葉の力を信じている――ああ、外国語大学というのは、言葉を学ぶ大学なのだな、と思った。その後大学はいろいろと気ぜわしくなり、いつまでも自由でのんびりというわけにはいかなくなってきているけれども、でも、言葉を大事にするという教育方針は、まだ失われていないと思うし、これからどういう変革があろうとも、その基本線は守っていきたいと思う。

大学院を出たばかり、30にもならないうちにこの大学に赴任したわたしにとっては、御輿先生は、同僚というよりは恩師というべき存在であった。そう、昔は勉強会などをやるゆとりがあったが、そういうときなど、わたしの拙い発表に対する先生のコメントは、指導教官が指導学生に対するもののようであり、わたし自身も、自らの未熟さ、考えの浅さを自覚させられつつ、早く研究者仲間として認めていただけるよう頑張ろうと思った記憶がある。その後も、こんな論文を書いていては御輿先生に苦笑されるな、これなら認めてもらえるだろうか、という基準が、わたしのなかに出来上がっていったように思う。

博士論文を提出しようというときにも、御輿先生はいろいろと相談にのってくださった。母校が論文博士を認めてくれなかったこともあるが、博士論文の提出先を考える際、わたしのこれまでの論文の大半を読み、その長所も短所もよく知ったうえで評価してくださる御輿先生にこそ主査をお願いしたいと思い、神戸外大に提出することを決めた。その論文は、どちらかといえば、御輿先生が大事にしてこられた言葉の細部にこだわるテクスト研究ではなく、テクストの外側を扱う文化研究に傾いてたので、先生にどう評価されるか、どう批判されるか、内心ではとても不安だったが、これを認めていただけたとき、ようやくわたしも、一人前になれたような気がした。

初めてわたしが、恐れ多くも御輿先生と新野先生と名前を並べる（肩を並べる、とは到底言えない）立場で仕事をさせていただいたのが、先生のご退官を記念に出版した論文集『言葉という謎――英米文学・文化のアポリア』の編集作業だった。とは言っても、編集の一番大変な作業は、新野先生がやってくださったのだが。学生の論考に朱を入れるときの話し合いでは、御輿先生が個々の学生の個性に合わせて指導スタイルを変えている点に勉強させられたし、言葉の微妙なニュアンスに対する感性や、誤字を見つける鋭さにも感服した。また、本や各章のタイトル、論文の配置、表紙選び、文字の配置などの編集作業では、本のマテリアリティに対する先生の感性にも触れることができ、楽しいひとときだった。本の副題に「アポリア」という言葉を使い、タイトルの英訳に Enigmata という言葉を選ぶなど、ちょっと気取った言葉を使っても気障にならないのは、御輿先生ならではだと思う。

この『言葉という謎』の掉尾を飾る御輿先生のご論考「反復する「ストローク」――『灯台へ』でリリーが得たもの」に、「実体をもたないはずの言葉の群れに意図的にすり寄ろうとするかのような」という表現が出てくる。これは、『灯台へ』の登場人物ラムジー夫人の言葉に対する態度を評したものであるが、言葉があたかもマテリアルなものであるかのように、リズムや手触り、雰囲気や体温など、言葉の詩的な性質にこだわる作者ヴァージニア・ウルフの態度についても評したものだと思う。そしてそれは、御輿先生の言葉に対する態度にも通じている。御輿先生の書く文章は、言葉のもつ詩的な側面に注意を払ったものだと思う。読んでいて耳に心地よいし、文章が、その内容以上に心に訴える力をもつ。文学研究者の後輩として、御輿先生から一番学びたいのはその点であり、わたしにとって永遠の目標である。

言葉というのは、人が発明したもののなかで最も創造性豊かで最も扱い難い道具だ。言葉は、誰にでも使え、手軽で、有用であるが、厄介でもある。他者と自分自身を深く知るための手立てであると同時に、その仲をあっけなく裂いてしまう地雷ともなる。言葉を巧みに使いこなし、その創造性を最大限引き出すのが詩人や小説家などの文学者であるとすれば、その魅力を解きほぐし、伝えていくのが文学研究者であり教師の役割であろう。御輿先生はそうした文学研究者・教師の範を示してくださった。御輿先生の教えを受けることができた学生たちは幸運だと思うが、御輿先生が退官された後に入ってきた学生が不運とならないよう、わたしも努力していきたいと思う。御輿先生に、そして神戸市外国語大学に対して抱いた第一印象――英語であれ日本語であれ、言葉を大事にする、という基本姿勢を、しっかり守っていきたいと思う。